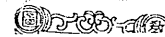


K220.74

7



山本正夫  
著



K220.74

-7

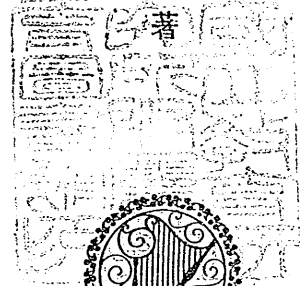
東京  
光成館藏版

274

180

新 制 南  
樂 典 教

山 本 正 夫



東 京

光 成 大 館 藏 版

14. 12. 3

丙 亥

274  
180

新制樂典教本に題す

曩に「新制音程教本」と題して一本を公刊するや音楽教育家より絶大なる賛辭を賜はり供給未だ備はらざるに需要の早くも相踵ぎたるは著者の欣幸として多謝措く能はざる所なり。

樂界の進歩は駸々として寸閑なく、日新の研鑽月進の攻究蓋し頗る目醒ましきものあり。就中樂語に至りては元來不徹底不完全なるもの多かりしため種々改訂せられ或は語句を修正し、新譯を制定し其他未定の標語の解決せられたるもの尠からず。然るに現行の樂典書の多くは、依然として舊套を墨守し爲に教壇に臨みて講述甚惑ふことなしとせず、乃ちこゝに「新制樂典教本」と題して新制樂語を用ゐて簡潔に樂典の一般を講せんとし書體亦舊慣を破りて全部を横文體に植字して披見に便ならしめ、樂譜は本邦最高級の技術者に命じて鮮明と好感とを期したり。敢て樂界指導を以て任せらるゝ我新進有爲の士に薦む。

本書編纂に當り同學の俊才 林 松木君の助力に負ふところ大なり。特書して感謝の意を表す。

大正十三年中秋

帝都の巽豊島岡樂邸にて

山 本 正 夫

新 制  
樂 典 教 本

目 次

總 論 .....	1
第一篇 樂譜論 .....	2
第一章 譜 表 .....	2
第一節 譜表の位置 .....	2
第二節 加間及加線 .....	2
第二章 音 名 .....	3
第三章 音部記號 .....	5
第一節 高音部記號 .....	5
第二節 低音部記號 .....	6
第三節 大譜表と其音名 .....	7
第四章 音 符 .....	7
第一節 單純音符 .....	8
第二節 附點音符 .....	9

第三節	複附點音符	9
第五章	休止符	10
第六章	縱線	12
第一節	單縱線	12
第二節	複縱線	12
第七章	拍子	13
第一節	拍子記號	13
第二節	拍子の種類	14
第三節	強起及弱起	17
第四節	拍節法	18
第五節	三連音—變拍子	18
第六節	切分音	19
第八章	嬰變及本位記號	20
第九章	速度標語	22
第十章	發想記號及發想標語	25
第十一章	雜記號	27
第一節	連續記號及連結記號	27

第二節	スタッカート	28
第三節	延長記號及終止記號	29
第十二章	省略記號	30
第十三章	裝飾音	33
第二篇	音程論	35
第一章	音程	35
第一節	全音階的音程	36
第二節	半音階的音程	37
第三節	音程の轉回	38
第三篇	音階論	40
第一章	音階	40
第一節	長音階	41
第二節	短音階	44
第三節	雅樂調音階	47
第四節	俗樂調音階	48
第五節	各旋法の性質	49
第二章	移調	50

第三章 轉調	51
第四篇 和聲論	53
第一章 和聲學	53
第一節 人聲の區域	53
第二節 協和音及不協和音	54
第二章 三和音	55
第三章 七の和音	56
第四章 轉回和音	57
第五章 四聲音部	58
第六章 和音の進行	59
第七章 終止法	60

新 制  
樂 典 教 本

總 論

音の高低、長短、強弱等を適當に配列して之を調和連結し、以て吾人の感情を表はせるものを<sup>①</sup>音樂といふ。

音樂上種々の事項を表示する諸記號及樂理を記述せるものを<sup>②</sup>樂典といふ。

樂典を論ずるに當り便宜、音樂上の諸記號に關する樂譜論、諸種の音程及音階に關する音程論、音階論、和聲に關する和聲論の四篇に大別す。

① 音 樂

② 樂 典

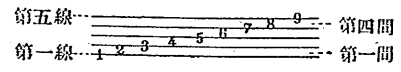
# 第一篇 樂譜論

## 第一章 譜表

樂譜の基礎をなすものを<sup>①</sup>譜表といふ。譜表は五條の平行線より成り、音樂を記載するものとす。

### 第一節 譜表の位置

-圖 1- 聲音の高低を記載するには譜表の線上及線間を以てす、線及間の名稱は各別の下より上に數へて第一線乃至第五線第一間乃至第四間と云ふ。而して線上及線間を各一度といふ、故に譜表は總べて九度の位置を有す。

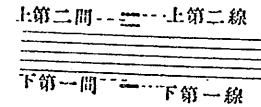


### 第二節 加間及加線

譜表の九度の他に、更に高低の諸音を

①譜表

-圖 2-



記載せんには第一線の下及第五線の上にある<sup>②</sup>加間を用ひ更に尙ほ高低の位置を要する時は、

臨時に<sup>③</sup>加線と稱する短線を用ふ。この加線によりて生じたる間をも加間といふ、其名稱圖2の如し。

## 第二章 音名

種々なる樂音に附したる名稱を<sup>④</sup>音名といふ。故に音名は固定せるものにして一定不變なり。

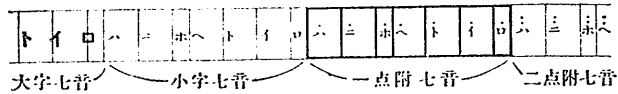
今各國の音名を記せば次の如し。

ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ	……	日本
C	D	E	F	G	A	B	……	英米
C	D	E	F	G	A	H	……	獨逸

- ①加間
- ②加線
- ③音名

音楽に用ふる聲音は、其數極めて多けれども、此七種の音名を繰返して用ふるものにして、高低の異なる同名の音は、文字の大小、或は文字に小點を附して、之を區別す。

—圖3—

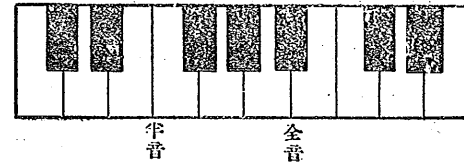


各音の距離には、大小の差あるものなり、例へばホとへ及ロとハの二音間は狭くして、之を半音程といひ、其他の各音間は、廣くして之を全音程といふ。—圖3—

ピアノ、オルガン等の有鍵樂器に於ては、黒鍵の左右にある二個の白鍵間は凡て全音程にして中央に黒鍵を挟まざる二組の白鍵—ホ、へ及ロハ—間は凡て半


音程なり。

—圖4—



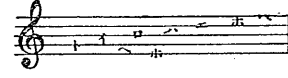
### 第三章 音部記號

樂音の高低に關する部屬を表す記號を音部記號といひ、普通用ふるものは次の二種なり。

 高音部記號

 低音部記號

#### 第一節 高音部記號

① 高音部記號は、樂音の高き部屬を表す記號 

—圖5—

① 音部記號

② 高音部記號—ト音記號—





符頭に符尾と稱する縦線を加へたるもの、其縦線の末端に鉤を添へたるもの等あり。

音符を大別して、單純音符、附點音符、複附點音符の三種とす。

### 第一節 單純音符

普通に用ふる<sup>0</sup>單純音符は次の六種なり。

名 稱	形 狀	成 立	時間の割合	拍數の割合
全 音 符		白楕圓	1	四 拍
二 分 音 符		白楕圓、符尾	$\frac{1}{2}$	二 拍
四 分 音 符		黒楕圓、符尾	$\frac{1}{4}$	一 拍
八 分 音 符		黒楕圓、符尾、一鉤	$\frac{1}{8}$	二分の一拍
十六分音符		黒楕圓、符尾、二鉤	$\frac{1}{16}$	四分の一拍
三十二分音符		黒楕圓、符尾、三鉤	$\frac{1}{32}$	八分の一拍

<sup>0</sup>單純音符

### 第二節 附點音符

單純音符の右方に一點を附加したるものを<sup>0</sup>附點音符といふ。

附點音符は、單純音符本來の時間に其二分の一の時間を加へたるものなり。

其名稱、形狀及時價等次の如し。

名 稱	形 狀	時 價
附點全音符		$\text{white circle with dot} = \text{white circle} + \text{white circle with stem}$
附點二分音符		$\text{white circle with stem and dot} = \text{white circle with stem} + \text{white circle with stem}$
附點四分音符		$\text{black circle with stem and dot} = \text{black circle with stem} + \text{white circle with stem}$
附點八分音符		$\text{black circle with stem, hook, and dot} = \text{black circle with stem, hook} + \text{white circle with stem}$
附點十六分音符		$\text{black circle with stem, two hooks, and dot} = \text{black circle with stem, two hooks} + \text{white circle with stem}$

### 第三節 複附點音符

單純音符の右方に二點を附加したるものを<sup>2</sup>複附點音符といふ。

<sup>0</sup>附點音符

<sup>2</sup>複附點音符

複附點音符は單純音符本來の時間に其四分の三の時間を加へたるものなり。其名稱、形狀及時價等次の如し。

名 數	形狀	時 價
複附點全音符	o..	o.. = o + d + d
複附點二分音符	d..	d.. = d + d + d
複附點四分音符	d..	d.. = d + d + d
複附點八分音符	d..	d.. = d + d + d

## 第五章 休止符

樂曲の進行中に聲音の默止を表す記號を<sup>0</sup>休止符といふ。

普通使用せらるゝ休止符には六種あり。

其名稱、形狀及默止時間の割合次の如

0 休 止 符

し。

名 稱	形 狀	時間の割合	拍數の割合
全 休 止 符		1	四 拍
二 分 休 止 符		$\frac{1}{2}$	二 拍
四 分 休 止 符		$\frac{1}{4}$	一 拍
八 分 休 止 符		$\frac{1}{8}$	二分の一 拍
十六分休止符		$\frac{1}{16}$	四分の一 拍
三十二分休止符		$\frac{1}{32}$	八分の一 拍

全休止符は其拍數の割合四なれども時には一小節の默止を示すことあり、例へば二拍子の樂曲に於ては二拍、六拍子の樂曲に於ては六拍、即ち一小節の全部を默止すべき時にも用ひらる。

この他附點休止符、複附點休止符—其構成法は附點音符の場合と同様なり—

あれども現今あまり使用せられず。

## 第六章 縦線

譜表を縦断する直線を<sup>①</sup>縦線といふ。  
縦線には単縦線、複縦線の二種あり。

### 第一節 単縦線

—圖 8—



楽曲を等しき時價を有する小部分に  
區分するため、譜表を縦断する一條の直  
線を<sup>②</sup>單縦線といふ。然して區分せられ  
たる小部分を<sup>③</sup>小節といふ。—圖 8—

### 第二節 複縦線

譜表を縦断する二條の直線を<sup>④</sup>複縦線  
といふ。複縦線には終結的複縦線、區劃

① 縦線  
② 單縦線  
③ 小節

④ 複縦線

的複縦線の二種あり。

<sup>①</sup>終結的複縦線は専ら楽曲の終結を示  
すに用ゐ、一線は細く一線は太く記す。

—圖 8—

<sup>②</sup>區劃的複縦線は、楽曲の中間に置いて、  
一楽曲を分劃する場合、楽曲の中途に於  
て、調子記號又は拍子記號を變更する場  
合等に用ゐ、二線とも同一の太さに記す。

—圖 8—

## 第七章 拍子

楽曲には其進行中、常に一定の時間内  
に現はるゝ規則正しき強弱の配列あり、  
之を<sup>③</sup>拍子といふ。

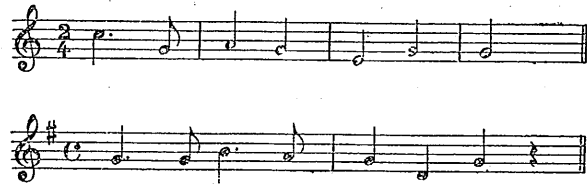
### 第一節 拍子記號

拍子は譜表の始、音部記號及調子記號  
の次に、重なれる數字若くは、一種の記號

① 終結的複縦線  
② 區劃的複縦線  
③ 拍子

を以て表示す、之を<sup>0</sup>拍子記號といふ。拍子記號の下の數字は一拍に相當する音符の種類を示し、上の數字は一小節内に含める拍數を示すものなり。—圖 9—

—圖 9—



記號 C は  $\frac{4}{4}$  と同じく一拍に數ふべき基準音符の四分音符なること及び各小節を四拍到數ふべきことを表はすものなり。

### 第二節 拍子の種類

普通用ふる拍子の種類、拍子記號及強弱の位置等次の如し。但し樂曲中の休止符も亦之を拍數中に加ふべきものとす。

#### 0 拍子記號

拍子の種類	拍子記號	一拍とすべき音符の種類及其拍數	強弱の位置
四分の二拍子	$\frac{2}{4}$	四分音符、二個	第一拍強
二分の二拍子	$\frac{2}{2}$ C	二分音符、二個	第二拍弱
四分の四拍子	$\frac{4}{4}$ C	四分音符、四個	第一、三拍強
八分の四拍子	$\frac{4}{8}$	八分音符、四個	第二、四拍弱
四分の三拍子	$\frac{3}{4}$	四分音符、三個	第一拍強
八分の三拍子	$\frac{3}{8}$	八分音符、三個	第二、三拍弱
八分の六拍子	$\frac{6}{8}$	八分音符、六個	第一、四拍強
四分の六拍子	$\frac{6}{4}$	四分音符、六個	第二、三、五、六拍弱

-圖 10 - A



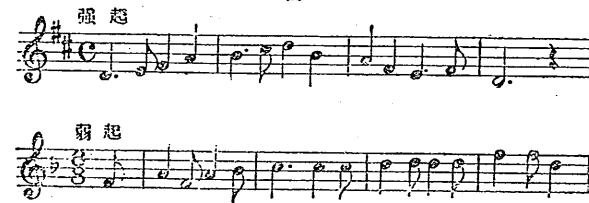
B

圖 10 は各拍子の種類に従ひ、強弱の位置を示したるものにして、音符の上に垂點あるものは強聲にして、二個のものは一個のものより稍々強し。

第三節 強起及弱起

樂曲は強聲部に始まるものと、弱聲部に始まるものとの二種あり。前者を強起後者を弱起といふ。—圖 11—而して弱起の場合、樂譜上に於ては最初と最後との小節を合算して、一小節と見做し、之を變格小節といひ他のものを正格小節といふ。

-圖 11-



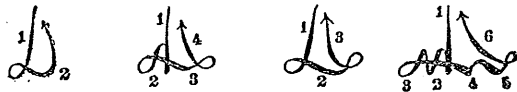
- ① 強起
- ② 弱起
- ③ 變格小節
- ④ 正格小節

## 第四節 拍節法

拍子を正しく数ふる方法を<sup>0</sup>拍節法といふ。拍節法は手或は鞭により、其拍数を数ふると共に、音の強弱、緩急並に曲趣等をも併せ示し得るものにして、合唱及合奏の指揮には、皆この方法を採用す。

拍節法を圖解すれば次の如し。

二拍子      四拍子      三拍子      六拍子



## 第五節 三連音—變拍子—

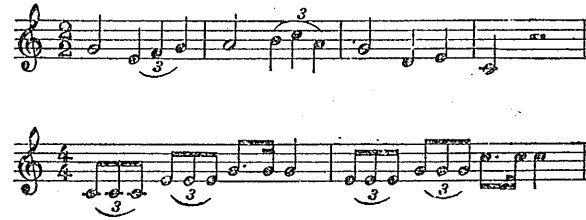
樂曲に一種の趣味を與へ、若くは歌詞等の配置上、四分音符、若くは八分音符三個を弧線と<sup>3</sup>の數字とを以て連結したるものを<sup>2</sup>三連音といひ、拍子上よりは變拍子といふ。三連音は、其音符と同一なる二個の音符の時間を以て奏唱すべき

<sup>0</sup>拍節法

<sup>2</sup>三連音

ものなり。—圖 12—

—圖 12—

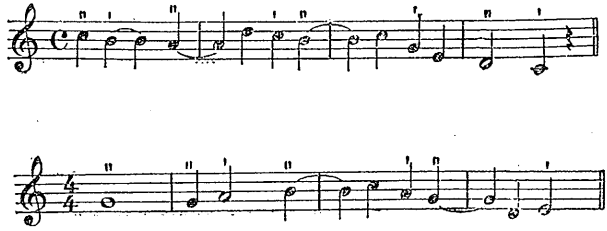


## 第六節 切分音

一小節内又は二小節に亘り、同じ高さの弱聲部と強聲部との音を結びて、一つの聲音となすことあり、之を<sup>0</sup>切分音といふ。この場合には強聲部は其連結の始に移るものにして、其結果、強弱の位置を換ふるに至る。この連結したる二音、二小節に亘るものは、弧線によりて之を示し、同一小節内のものは、一個の音符、或は弧線によりて之を表はす。—圖 13—

<sup>0</sup>切分音

—圖 13—



## 第八章 嬰變及本位記號

音の高さを半音高くする記號<sup>♯</sup>を嬰記號、低くする記號<sup>♭</sup>を變記號といふ。嬰又は變の記號によりて、變化せられたる音を、本來の高さに復さんには、記號<sup>♮</sup>を用ふ。之を本位記號といふ。—圖14—

嬰、變及本位記號は、何れも音符の左側に記入するものにして、是等の記號の附せられたる音は、其音名に、嬰、變又は本位の語を冠して、其名稱となす。

- ♯ 嬰記號
- ♭ 變記號
- ♮ 本位記號

—圖 14—

嬰音を更に半音高め、變音を更に半音低めんには、<sup>♯</sup>重嬰記號<sup>♭</sup>重變記號<sup>♮</sup>を附し、重嬰音を嬰音に復し、重變音を變音に復すには、一個の本位記號と、一個の嬰記號<sup>♯</sup>、一個の本位記號と一個の變記號<sup>♭</sup>を附し、全く本來の高さに復すには、何れも一個の本位記號を附す。

—圖 15—



樂曲の中途に於て、臨時の必要によりて、附せられたる嬰、變及本位記號は臨時記號として用ゐらるるものにして、其小節内を限り、この記號の附せられたる音

- ♯ 重嬰記號
- ♭ 重變記號
- ♮ 臨時記號



より右にある、同名の音に作用し、次の小節に至れば自然其効力を失ふ。

音部記號の次に記したる、嬰及變はこれを、調子記號といひ、其樂曲全部の同名の音に其効力を及ぼすものなり。

### 第九章 速度標語

樂曲の速度を示す語を<sup>0</sup>速度標語といふ。速度標語は、通例伊太利語を以て記載すれども、近時は各國其自國語を以てこれを表はすこと少からず。

次に擧げたる標語は、樂譜の始譜表の上部に記載するものにして、中途に於て之を變更すべき標語の、現はれざる限り、其効力、樂曲全部に亘るべき性質のものなり。緩徐なるものより順次速度の大きなものに従ひて排列せば次の如し。

<sup>0</sup>速度標語

標語	讀方	意義
Largo,	ラルゴ	最も緩やかに
Larghetto,	ラルゲット	甚だ緩やかに
Adagio,	アダヂオ	緩やかに
Andante,	アンダンテ	稍々緩やかに
Andantino,	アンダンティノ	僅かに緩やかに
Moderato,	モデラート	中等の速さ
Allegretto,	アレグレット	稍々速く
Allegro,	アレグロ	速く
Presto,	プレスト	極めて速く
Prestissimo,	プレスティッシモ	最も速く

樂曲の中途に記載して、一部分の速度を變更せんには、次の標語を用ふ。

標語	讀方	意義
ritardando-rit.-	リタルダンド	漸次緩やかに
rallentando-rall.-	ラルレンタンド	同

Stringendo, ストリンデェンド 漸次急速に  
 accelerando-accel.- アツチエレランド 同  
 ad libitum-ad lib.- アッドリビトム 奏者の適宜に

以上の標語は、時として次の語を添ふることあり。

Poco, ポーコ 僅かに  
 Molto, モルト 甚だ

一度變更したる速度を、本來の速度に復さんには、

a tempo, アテンポー 本來の速度に用ふ。

樂曲進行の速度を計る器械を<sup>0</sup>拍節機といふ。拍節機の度数と速度標語とを對照すれば次の如し。

Largo ♩ = 40-69    Larghetto ♩ = 72-96  
 Adagio ♩ = 100-120    Andante ♩ = 126-152

<sup>0</sup>拍節機—メトロノーム—

Allegro ♩ = 160-176    Presto ♩ = 184-208  
 ♩ = 40 とあらば Largo にして、一分間に四分音符を四十奏すべきことを示す。

## 第十章 發想記號及發想標語

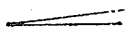
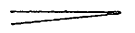
樂曲の趣味を發揮して、其感情を一層表はさんが爲めには<sup>0</sup>發想記號及<sup>e</sup>發想標語を用ふ。而してこの記號及標語は、強弱に關するものと、曲想に關するものとの二種あり。

強弱に關するものは次の如し。

標語又は記號	讀方	意義
Piano- <i>p</i> -	ピアノ	弱く
Pianissimo- <i>pp</i> -	ピアノッシモ	極めて弱く
Mezzo Piano- <i>mp</i> -	メツゾピアノ	稍々弱く
Forte- <i>f</i> -	フォルテ	強く

<sup>0</sup>發想記號

<sup>e</sup>發想標語

Fortissimo- <i>ff</i> -	フオルティッシモ	極めて強く
Mezzo Forte- <i>mf</i> -	メツゾフォルテ	稍々強く
	クレッシェンド	漸次強く
Crescendo-Cresc.-	同上	
	デクレッシェンド	漸次弱く
Decrescendo-Decresc.-	同上	
Diminuendo-Dim.-	デイミヌエンド	漸次弱く
Sforzando- <i>sf</i> 又は $\wedge$	スフォルザンド	特に強く

強弱記號は通例樂譜の上部に記載す。

曲想に關するものは次の如し。

標語	讀方	意義
Animato	アニマート	感情深く
Calando	カランド	消えるか如く
Cantabile	カンタービレ	謠ふが如く
Con fuoco	コンフオコ	熱火の如く

Con moto	コンモート	發動を以て
Con spirito	コンスピリート	熱心を以て
Leggiero	レヂェーロ	輕快に弱く
Maestoso	マエストーソ	威嚴を以て
Dolce	ドルチェ	柔かに弱く
Legato	レガート	滑かに
Sostenuto	ソステヌート	音をよく保つて
Espressivo	エスプレツシーボ	想を込めて

## 第十一章 雜記號

前記諸章の何れにも屬せざる諸記號を雜記號と稱す。

### 第一節 連續記號及連結記號

度を異にせる二個、又は二個以上の音符に附したる弧線<sup>②</sup>を連續記號といひ、その附せられたる數個の音を連續して、滑

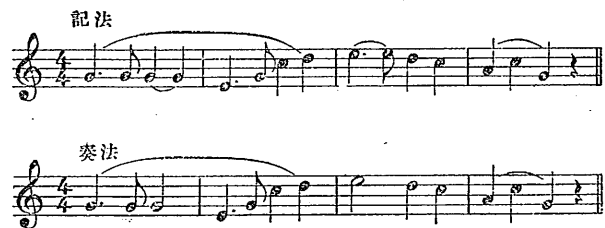
① 雜記號

② 連續記號—スラー—

かに奏すべきことを示す。

度を同ふせる二個、又は二個以上の音符に附したる弧線を<sup>0</sup>連結記號といひ、その附せられたる數個の音を合して一音の如く奏す。—圖16—

—圖16—



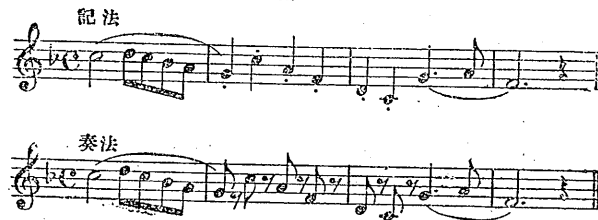
### 第二節 スタッカート

樂曲中、一部分の聲音を分離鮮明に奏唱することあり。是を<sup>2</sup>スタッカートと云ふ。音符の上又は下に圓點又は垂點を附記して是を示す。圓點の場合には圖17の如く奏するを普通とすれども垂點の場合には猶一層分離鮮明に奏すべきなり。

①連結記號—タイ—

②スタッカート

—圖17—



### 第三節 延長記號及終止記號

音符及休止符の上、又は下に附せられたる<sup>0</sup>の記號を延長記號といひ、音符及休止符の本來の時間を任意に延長すべきことを示す。而してこれと同記號を複縦線上に

—圖18—

置く場合には其樂曲の終止を示すものにして、之を<sup>2</sup>終止記號といふ。

①延長記號

②終止記號

## 第十二章 省略記號

楽曲中同一の部分あるときは、或記號又は文字を用ひて、記譜を簡略にすることあり、この略記法に用ふる記號を省略記號といふ。省略記號には小節に關するものと、音符に關するものとの二種あり。

小節に關するものは次の如し。

0省略記號

—圖19—

The figure consists of four musical staves. The first staff shows a melody with a double bar line and repeat dots, with a small 'a' above it. The second staff shows a melody with a first ending bracket labeled '1' and a second ending bracket labeled '2'. The third staff shows a melody ending with a double bar line and repeat dots, with 'Fine' written above and 'D.C.' below. The fourth staff shows a melody with a double bar line and repeat dots, with a small 'd' above and a double bar line with repeat dots below.

圖19中 a は、同一の場所を反覆するものにして、記號  $\parallel$  を 0 反復記號といふ。

b は反復記號より始に反り次に 1. を省き 2. を奏す。c は最後より始に反り途中 Fine に至りて終る。即ち D.C. は  $\overset{0}{D}$ a  $\overset{0}{C}$ apo 「最初より」の略字にして Fine は終の意なり。d は後の  $\ast$  より前の  $\ast$

(反復記號)

に反りへにて終る。後部の♩の代りに  
アルセグノ  
 Al segno<sup>アルセグノ</sup>記號にまでの意」と記すことあり。

圖20は同一音符若くは同一進行の略  
 記法にして、主として器樂の樂譜にのみ  
 使用せらる。

—圖20—

Figure 20 shows two systems of musical notation. Each system consists of a treble clef staff with notes and a piano staff with chords. The first system shows a sequence of notes and chords. The second system shows a sequence of notes and chords, with a triplet of eighth notes in the piano staff.

## 第十三章 裝飾音

樂曲中、一部の旋律に趣を添へ、感興を  
 深からしめんが爲めに特に附加する音  
 を<sup>①</sup>裝飾音といひ、これを示す記號を<sup>②</sup>裝飾  
 記號といふ。裝飾音には倚音、回音、顫音、  
 漣音、琵琶音の五種あり、その記號及奏法等  
 次の如し。

—圖31—

Figure 31 shows two systems of musical notation. The first system is labeled '倚音' (Appoggiatura) and shows a note with a grace note. The second system is labeled '回音' (Ornament) and shows a note with a grace note and a triplet of eighth notes.

- ①裝飾音
- ②裝飾記號

記法  
奏法

顫音

記法  
奏法

速音

記法  
奏法

琵琶音

記法  
奏法

## 第二篇 音程論

### 第一章 音程

同時又は時を異にして奏唱せらるゝ  
二音間の高度の關係を音程といふ。

—圖 22—

—圖 22—

譜表上二  
度に亘る半

—圖 23—

音を全音階  
的半音とい

ひ、—圖 23a—

嬰若くは變  
記號等の臨

時記號によりて生じたる同度の半音を

①音程

②全音階的半音

### 0 半音階的半音といふ。—圖 23b—

音程はこれを大別して、全音階的音程、半音階的音程の二種とす。

#### 第一節 全音階的音程

全音階中の二音間に成立する諸音程を<sup>②</sup>全音階的音程といひ、其數十四あり。

故に一名十四音程ともいふ。

音程は同音の外二音間に含有する半音及全音の多少により、其度數に長、短、増、減、完全等の名稱を冠して之を區別す。而して長及完全より大なる音程を<sup>③</sup>増音程、長より小なるを<sup>④</sup>短音程、完全(一度の外)及短より小なるを<sup>⑤</sup>減音程といふ。其名稱及各音程に含有する全音、半音の數、圖 24 の如し。

0 半音階的半音  
② 全音階的音程  
③ 増音程

④ 短音程  
⑤ 減音程

—圖 24—



音程	含有する音	音程	含有する音
完全一度	同音	完全五度	三全音、一半音
長二度	一全音	減五度	二全音、二半音
短二度	一半音	長六度	四全音、一半音
長三度	二全音	短六度	三全音、二半音
短三度	一全音、一半音	長七度	五全音、一半音
完全四度	二全音、一半音	短七度	四全音、二半音
増四度	三全音	完全八度	五全音、二半音

#### 第二節 半音階的音程

全音階的音程を、嬰又は變記號によりて、増減したる前記十四音程以外の諸音程を<sup>①</sup>半音階的音程といふ。普通用ふる

0 半音階的音程



半音階的音程の名稱及各音程に含有する全音、半音の數は圖25の如し。

—圖25—



音程	含有する音	音程	含有する音
増一度	半音階的半音一	増五度	三全音、 全音階的半音一 半音階的半音一
増二度	一全音、 半音階的半音一	増六度	四全音、 全音階的半音一 半音階的半音一
減三度	全音階的半音二	減七度	三全音、 全音階的半音三
減四度	一全音、 全音階的半音二	減八度	四全音、 全音階的半音三

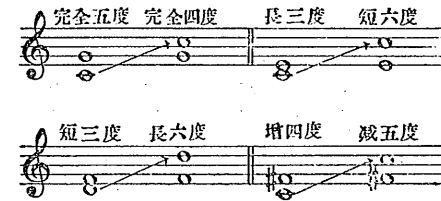
第三節 音程の轉回

音程の下位の音を上方<sup>0</sup>オクターブ<sup>7</sup>第八音に移し、或は上位の音を下方第八音に移すことを音程の轉回といひ、其の新に生じたる

- ①第八音—オクターブ—
- ②音程の轉回

—圖26—

音程を轉回音程といふ。音程の轉回に依りて生ずる結果は、



完全音程は同じく完全音程  
長音程は短音程、短音程は長音程、  
増音程は減音程、減音程は増音程  
となり、其度數は、九より原音程の度數を減じたるものなり。—圖26—

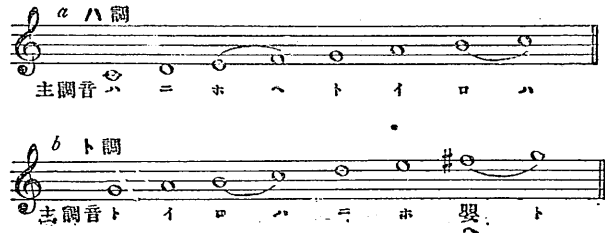
①轉回音程

### 第三篇 音階論

#### 第一章 音階

或音を基礎として、一定の法則に従ひて、配列せられたる八音の一行を<sup>①</sup>音階といふ。音階の基礎とせる第一音は、其音階中最も主要なるものなれば、之を<sup>②</sup>主調音といひ、此主調音の音名を以て、其音階の調名とす。—圖27—

—圖27—



①音階  
②主調音

例へば主調音ハなる時は<sup>①</sup>ハ調といひ、トなる時は<sup>②</sup>ト調といふが如し。而してハ音よりハ音、若くはト音よりト音に至る八音の一行をも亦<sup>③</sup>八個音といふ。

我國の學校音樂に用ゐらるゝ音階には長音階、短音階、雅樂調音階、俗樂調音階の四種あり。

#### 第一節 長音階

音階の第三音、第四音及第七音、第八音間は半音程にして、他は悉く全音程なる八音の一行を<sup>④</sup>長音階といふ。—圖28—

—圖28—



①ハ調  
②ト調  
③八個音—オクターブ—  
④長音階

音階の第一音、第三音間長三度に起れるを以て長音階といふ。

長音階中ハ音を基として作れるものは總て自然音のみなり。依てこれを模範長音階といふ。—圖 28—

ハ調長音階の形式に倣ひ諸音を基礎として嬰若くは變記號を用ゐて諸種の長音階を作ることを得。—圖 27b— その嬰記號を用ゐて成れるものを<sup>①</sup>嬰種長音階、變記號を用ゐて成れるものを<sup>②</sup>變種長音階といふ。

—圖 29—

音階構成のため



用ゐし嬰若くは變記號は何れもこれを譜表の始、音部記號の次に記すものにしてこれを<sup>③</sup>調子記號といひ其樂曲の調子

- ① 嬰種長音階
- ② 變種長音階
- ③ 調子記號

を示すものなり。

—圖 30—

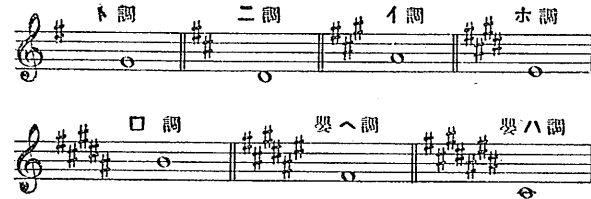
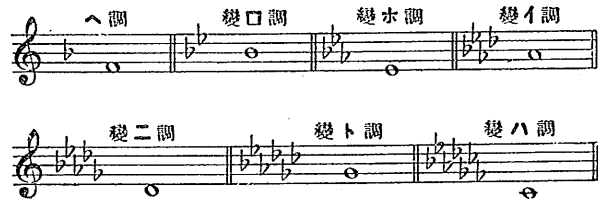


圖 30 はト調、ニ調、イ調、ホ調、ロ調、嬰へ調及嬰ハ調等の嬰種長音階と、其主調音とを示したるものなり。

變種長音階にはへ調、變ロ調、變ホ調、變イ調、變ニ調、變ト調及變ハ調の七種あり。調子記號及主調音の位置を示せば次の如し。

—圖 31—



第二節 短音階

短音階を分ちて自然的短音階、和聲的短音階、旋律的短音階の三種とす。

音階の第二音、第三音及第五音、第六音間は半音程にして他は悉く全音程なる八音の<sup>①</sup>一列を、自然的短音階といふ。

—圖 32—



① 自然的短音階

自然的短音階の第七音を半音高めたるものを<sup>②</sup>和聲的短音階といふ。—圖 32—

和聲的短音階の第六音を半音高めたるものを上行とし、自然的短音階を下行とするものを<sup>③</sup>旋律的短音階といふ。

—圖 33—



短音階中イ音を基礎として作れるものは總て自然音のみなり。依てこれを<sup>③</sup>模範的短音階—自然的—といふ。—圖 32—

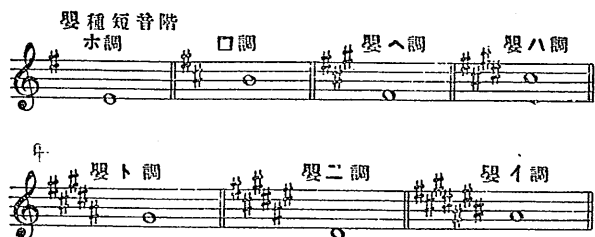
和聲的短音階、旋律的短音階の二種も亦イ調を模範とす。—圖 32-33—

- ① 和聲的短音階
- ② 旋律的短音階
- ③ 模範的短音階

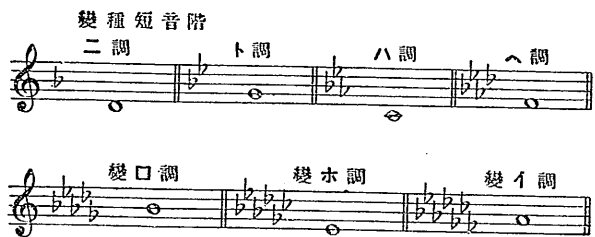
短音階も亦長音階に等しく嬰變兩種の諸音階を作ることを得。

調子記號並びに主調音の位置次の如し。

— 圖 34 —



— 圖 35 —



旋律的短音階及和聲的短音階の臨時

に用ゐたる嬰變及本位記號は調子記號中には加へざるものとす。

ホ短調とト長調との如く調子記號を同うせる長短兩音階は之を關係音階といひ特別密接なる關係あるものなり。

### 第三節 雅樂調音階

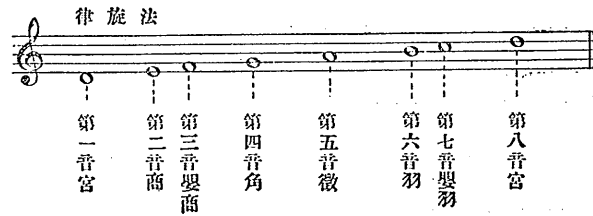
①雅樂は往古より我國に傳はれる音樂にして主として朝儀祭祀に用ゐらる。而して其音階に②呂旋法③律旋法の二種あれども現今學校音樂に用ゐらるゝものは律旋法のみなり。

律旋法は長音階の第二音に始まる八音の一系列に等し。

其音列は宮商角徵羽の五音に嬰商嬰羽の二音を加へたものなり。— 圖 36 —

- ①雅樂
- ②呂旋法
- ③律旋法

- 圖 36 -



#### 第四節 俗樂調音階

古來より我國の民間に行はるゝ音樂を總稱して俗樂といふ。俗樂の音階には陰旋法、陽旋法の二種あれども學校音樂には、多く陰旋法のものを用ふ。

陰旋法は五聲音よりなり其音階の第五音は上行と下行とを異にす。

陰旋法は長音階の第三音に始まり其第五音は上行に於ては長音階の第二音に等しく下行に於ては其第一音に等し。其他の音は圖 37 の如し。

- ① 俗樂
- ② 陰旋法
- ③ 陽旋法

- 圖 37 -



#### 第五節 各旋法の性質

現今學校音樂に用ゐらるゝ旋法の主なるものは長旋法、短旋法、律旋法、陰旋法の四種なり。

其性質は概ね次の如し。

長旋法	勇壯、快活、高潔
短旋法	閑雅、悲壯、悲哀
律旋法	優美、高雅
陰旋法	優婉、悲哀、陰氣

## 第二章 移 調

① 移調とは或調子にて成れる楽曲を他の高き又は低き調子に移して演奏又は記譜するをいふ。

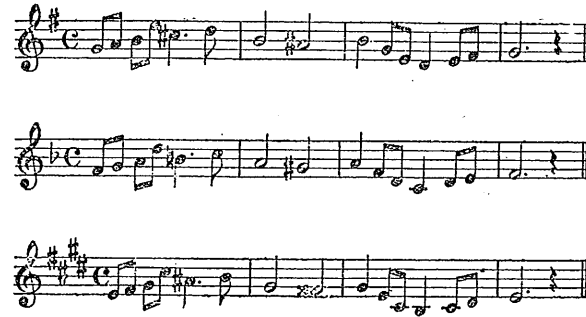
例へばハ調の楽曲を夫より高きト調若くは夫より低きホ調等にて記譜又は演奏するが如し。—圖 38—

移調を行ふには臨時記號の嬰變及本位記號等には特に注意すべし。

圖 38 は移調によりて臨時記號の變化せるを示せるものなり。

① 移 調

—圖 38—



## 第三章 轉 調

楽曲に變化を與へ、其心情を十分表現せんがため、楽曲本來の調子を一時他の調子に轉ずることあり、之を轉調といひ、其本來の調子を<sup>②</sup>主調、一時他に轉じたるものを<sup>③</sup>附屬調といふ。而して一時轉調せるものは、再び本來の調子に復して終るを本體とす。—圖 39—

① 轉 調  
② 主 調  
③ 附 屬 調

轉調には、調號を變更して轉ずるものと、調號を變ぜずして轉調するものとの二種あり。

—圖 39—



## 第四篇 和聲論

### 第一章 和聲學

高低を異にする二個以上の聲音が或方則の下に、相連續して進行するものを<sup>①</sup>和聲といひ、和聲に關する種々の法則を研究する學科を<sup>②</sup>和聲學といふ。

#### 第一節 人聲の區域

和聲學上重要な<sup>③</sup>は人聲の區域なり。人聲の區域は男女、年齢及各人の發育程度等によりて一定せずと雖も、其限界は通例各十三度を越えざるものとす。

人聲の區域は、男女の別及高低によりて次の四部に分つ。

- ①和 聲
- ②和 聲 學
- ③人 聲 の 區 域



—圖40—



第二節 協和音及不協和音

同時に奏する二音の調和よきものを  
①協和音といひ、然らざるものを、②不協和音  
といふ。

協和音を、其協和の度によりて更に、完全  
不完全の二種となし、其音程を示さば次  
の如し。

- |     |   |        |             |
|-----|---|--------|-------------|
| 協和音 | { | 完全協和音  | { 完全一度、完全四度 |
|     |   |        | { 完全五度、完全八度 |
|     | { | 不完全協和音 | { 長三度、短三度   |
|     |   |        | { 長六度、短六度   |

不協和音とは、上記八種の協和音を除

- ①協和音
- ②不協和音

きたる諸音程なり、

第二章 三和音

或音を第一音として、其上方第三度の  
音と第五度の音との三個より成る三聲  
音を①三和音といふ。而して其第一音は  
和音の基礎なるを以て、之を②根音といふ。  
又其第三音の長、短、第五音の増減等によ  
りて

- 長三和音—長三度と完全五度—
- 短三和音—短三度と完全五度—
- 増三和音—長三度と増五度—
- 減三和音—短三度と減五度—

の四種に分つ。—圖41—

—圖41—



- ①三和音
- ②根音

長三和音と短三和音とは最も普通に用ゐらるゝものにして、之を<sup>①</sup>普通和音といひ、<sup>⑤</sup> $\frac{5}{3}$ の和音ともいふ。

### 第三章 七の和音

三和音の上に、更に第七音—根音より—を加へたるものを<sup>②</sup>七の和音といひ、總べて、不協和音なり。故に七の和音の次には、必ず協和音を現はさざるべからず。この七の和音より、三和音に進むことを稱して、<sup>③</sup>七の和音の解決といふ。—圖42—

—圖42—



七の和音中、最も重要なものは、第五度上に構成せられたるもの即ち<sup>④</sup>五度の七の

- ① 普通和音
- ② 七の和音
- ③ 七の和音の解決
- ④ 五度の七の和音—七の屬和音—

和音にして之を七の屬和音ともいふ。

### 第四章 轉回和音

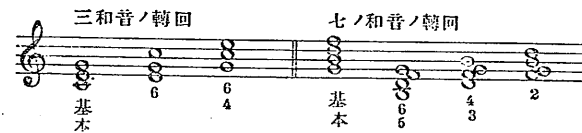
或和音の根音が、其低音に在らずして、他に移されたる和音を<sup>①</sup>轉回和音といふ。

三和音の第三音が、低音に在る場合を第一轉回又は<sup>⑥</sup> $\frac{6}{3}$ の和音といふ。—圖43—

三和音の第五音が、低音にある場合を第二轉回又は<sup>⑥</sup> $\frac{6}{4}$ の和音といふ。—圖43—

三和音と同様、七の和音も亦轉回して使用せらるゝものなり。—圖43—

—圖43—



- ① 轉回和音

## 第五章 四聲音部

四聲音部—四重音—を構成するには三和音の中或一音を重複せざるべからず其規定は、

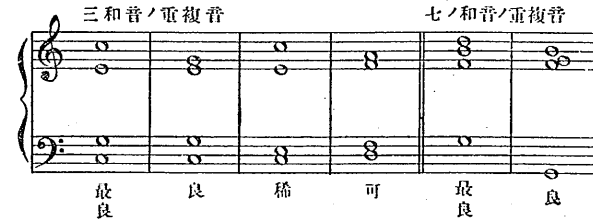
三和音の根音を重複するは最良にして第五音之に次ぎ、第三音の重複は稀なり。短三和音の第三音は重複し得れども、長三和音の第三音は通例重複せず。

—圖 44—

七の和音は四個の聲音にて成れるを以て、四聲音部を構成するに或音の重複を要せずと雖も、他の和音との連合上或一音を省略して他の音を重複することあり。通例第五音を省きて根音を重複し第七音及根音は必ず省略せず。

—圖 44—

—圖 44—



## 第六章 和音の進行

各種の和音が、一定の形式に従ひて進行するを和音の進行といひ、其形式に三種あり。

① 並進行とは、各聲音が同一方向に並行して進行するをいふ。

② 反進行とは、各聲音が互に相反する方向に進行するをいふ。

③ 斜進行とは、一は同度に止まり、他の聲

① 和音の進行

③ 斜進行

② 並進行

④ 反進行

音のみ自由に進行するをいふ。

— 圖 45 —



楽曲は通常以上三種の形式を適宜混用して成れるものなり。

## 第七章 終止法

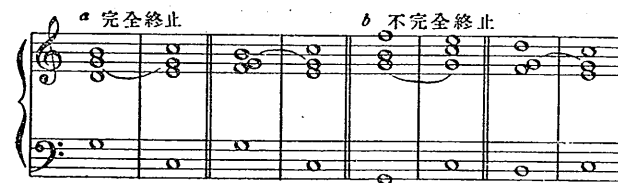
楽曲進行の終結を表はす方法を終止法といひ、普通用ふるものに完全終止法、不完全終止法及變格終止法の三種あり。

### ① 終止法

① 完全終止とは屬和音若くは七の屬和音より主和音に進行して解決するものにして、高音及低音には何れも其主調音を存す。

② 不完全終止とは、屬和音或は七の屬和音より主和音に進行すと雖も、其高音又は低音に主調音を存せざるか、或は屬和音又は七の屬和音の低音に根音を有せざるものなり。

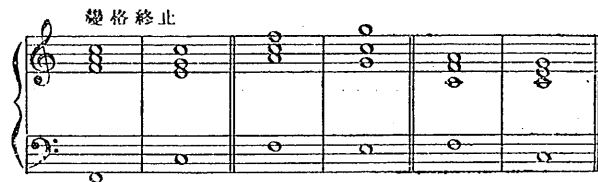
— 圖 46 —



③ 變格終止は、次屬和音—第四度上の和音—より主和音に進行して終止す。— 圖 47 —

- ① 完全終止
- ② 不完全終止
- ③ 變格終止

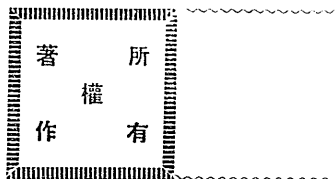
—圖 47—



以上三種の終止法中、其名の如く、完全終止は樂曲全體の終止に適し、不完全終止は樂曲の段落に用ゐられ、未だ終止には到達せざる感あり。變格終止は臨時終止の形式を採りたるものなれども、なほ満足なる終止の感を起すには足らざるものなり。

新制 樂典教本 終

大正十三年十月廿七日 印刷  
 大正十三年十月三十日 發行  
 大正十四年十一月廿七日 訂正再版印刷  
 大正十四年十二月一日 訂正再版發行



定價 金四拾四錢  
 臨時 大正十五年度  
 定價 金廿六錢

著者 山本正夫  
 發行者 東京市小石川區大塚三丁目三番地 三澤朝一  
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 風間直達

發行所

光成館書店 東京市小石川區大塚三丁目三番地  
 振替口座東京 二九八〇八番

一手販賣所

文修堂書店 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
 振替口座東京 五八七八二番



